

## 故ダニエル・ド・コッペとの出会い

山口昌男

二〇〇二年二月に電話があり愕然とした。三日前にド・コッペ氏が亡くなったとの知らせだった。そこで、私はド・コッペ氏の出会いを想い出した。

一九六七年十月、私は、アフリカ、ナイジェリアにおける2度目の調査からの帰途、パリに立ち寄った。知り合いもなく、パリ市内の安いホテルも知らないので、St.クアンタン（パリ市北の郊外）のユースホステルに宿泊してパリに出撃した。パリ市内を歩いたのはこれで二度目である。一度目は、一九六五年。これもナイジェリアのイバダン大学で教えて、帰国の途に立寄ったのであった。そのときにはイギリスとフランスの間を行き来した。一度目のフランス訪問の時には、特にアカデミックな関係の接触を持たなかった。

今回は、地下鉄オデオン駅で降りて、オデオン座の方角へ向かって歩いていった。東側に「野生の思考」という新しく開店した書店が目についた。ドアを押して、中に入り主人らしき人と少し話しているうちに店の名前が、当時人類学、言語学を中心に人気があった本に関係があることがわかった。丸善の信用状を出し、ところで本を多く買

うから日本に送っていただきたいと申し出た。主人は快く受け入れて、どうぞ御自由にごらんになってお選びくださいといった。そこで私は人類学、言語学や哲学の本を次々に選んで主人の棚の方へ乗せていった。たちまち、積んだ本が一メートルの山で三列になった。主人はあきれた顔をして私を見ていた。そのとき、ドアが開いて一人の若い男が入ってきた。主人はこの人は日本から来た人類学者であるが、本の買い方を見るとひじょうに広いバックグラウンドをもっている人らしい。少し話して見たらどうかと言った。そのハンサムな青年は、自分はパリ大学のナンテール校で人類学を教えているものだけれども、外へ出て向かいの喫茶店で話していきませんかと言ったので、わたりに船とばかりに、「それは良い。私は調査の帰りだが、調査の結果を話して見ましょう」といった。二人の青年たち（私は三十三歳、彼は三十歳くらい）は、二階のカフェに腰を下ろして話し始めた。フランス語をしゃべるのはあまりなれていないので、英語でしゃべるのを許してもらいたいと言って、私はナイジェリアのジュクン王国での調査の話をした。彼はダン・スペルベルという名前で構造論の人類学の若い論客として代表的な存在であった。十二時間ほど喋って、明日また会おうと言って別れを告げた。

次の日の昼、知人を連れたスペルベルと、その近くの喫茶店で一緒に食事をした。僕は主に調査の話をした。その日の夜、宿にダニエル・ド・コツペ氏から電話がかかってきた。明日五時ごろサンミッシェルの泉のところでピクアップするから待っていてほしいといわれた。そこへド・コツペ氏があらわれて、ジャン・ラトゥシュの家に行き、その四、五人とビールを飲んだ。一時間後、パトリック・マンジエの家に移った。人数はだんだん増え十人くらいになっただろうか。その後ジャンヌ・ファヴレというブルターニュの魔女の研究で知られるようになる人類学者のところに行ってワインを飲んで午前三時までしゃべっていた。「エバンス・プリチャードという人類学者が最

近亡くなったが、私もオックスフォードに滞在していた」という話をしたら、そこにいた女性が、エバンス・プリチャードの助手をしていたという。午前三時になって、各人を車で送ったド・コツペは、もうユースホステルも閉まっている時間なので、今日は自宅に泊まりなさいというので、私はその日ド・コツペのアパートに泊まった。

朝になって、朝食をとると、ド・コツペがユースホステルまで送っていくといってバサンクアンタンのユースホステルまで連れて行ってくれた。そこで、ド・コツペが「荷物をもってこい」と言ったので、どういふことかと聞いたら、これからは自分の家に泊まれという。「フランス人は自宅に人を泊めたがらないのではないか」と問うと、「僕は人類学者だから」と答えた。その後私は、ド・コツペのアパートに一月ぐらい滞在した。

ちょうどそのころナンテール大学は学生運動が始まっていた頃で、学生騒乱といわれていたが、実際にははな運動の兆しはみられなかった。研究会が各所で行われていて、そのひとつの研究会で自分の調査について発表した。ノルマンディーのディエップに別宅があるのでそこに行かないかとド・コツペが言うので、キバビルという村に行つてのんびりと滞在した。ド・コツペは、『チボー家の人々』の作者ロジェ・マルタン・デュガールの孫なので、父方の遺産としてパリの自宅の外にドラゴン街にも部屋を持っていた。そのほかにも母方の自宅とキバビルの別荘があったのである。ドラゴン街の部屋は現在住んでいる老人がいてその人が生きている間は住めないという条件だったので、彼は生前一度も自分の住居とすることはなかったようだ。キバビルの家は十二部屋あった。一階には、六m×三mの二列に並んだ棚があつて、ジュール・ロマン、デュアメールといった私が学生時代読んでいた本が並んでいた。それらは、ド・コツペのお母さんがサロンの持ち主であつたので、そのサロンに集まっていた人々の寄贈した本であつた。一九三〇年代の作家の本はほぼ網羅してあつた。ただし、ド・コツペはお母さんとの仲があまり

うまくいっていなかったようである。それは、マルタン・デュガールの著作権がド・コッペに渡り、その印税をド・コッペが国立図書館に寄贈してしまったためである。お母さんは息子を相手に訴訟を起こした。ド・コッペは、自分の利益にならないがために実の母に訴えられて法廷で争うのは気分的に楽なことではないと言っていた。

私が、日本に帰ることになって、最後の食事をしていた時に、来年十月からの新学期に、ナンテール大学に教えに来ないかと言ったので、まさかと思って、私はフランス語を読み書きはするが、しゃべるのはだめだ。だから来られないと言ったら、「君はわれわれが聞きたい情報と意見をたくさんもっている。だから、フランス語が得意でなくても、聴きたいと思う人がいれば問題は解決する」と言った。そこで僕は「フランス人はお世辞がうまいと聞いていたが、今の言葉を聞くと、予想以上にうまいと思う」といった。

翌年、十月からの赴任となっていたが、九月になってもなんの連絡もないので、催促の手紙を送った。すると、九月・十月と人類学科長がアフリカに休暇にでかけてしまい、私と家族をよぶ旅費と滞在費のサインが整っていないということが判明した。あちらの事情はわかったが、急いで航空券をおくってもらった。学科長が帰ってくるまでは何もできないので、ド・コッペ氏のアパートに二ヶ月ほど滞在した。正月から講義が始まったのだが、学科長は私の旅費の書類に一向にサインしようとしなかった。それで、私も人の家に世話になったままで落ち着いて教えることは不可能だといって、学科長に申し立てたが、これは意外と長くかかる問題であった。じつに次の年の九月までかかった。次の年の学科の会議でしばしば会議にかけて山口の旅費を出すべきかどうか議論にした。形式上招かれたから来ているのであって、いまさら会議にかけるとは失礼で不愉快だといった。学科長は若くて目立ったド・コッペに対する圧力になると考えたらしい。もちろん、ド・コッペも私を応援したが、フランス人は政治的圧力に

弱く、はじめド・コッペを支援していた人たちが多かったが、半年も経つと学科長側が増えていった。ド・コッペは感情的に話す面もあったので、だんだんと不利になったのである。自分に落ち度はないが、自分の問題が親しい人への圧力という感じで問題になったので、私は家族の分の旅費は、『アフリカの神話的世界』（岩波新書）の印税百万円ほどで払うからといって、無理やり問題を解決した。

その後、社会科学高等学術研究院のセンター長であるシェファー氏が、このセンター所属になりませんかという提案をしてきた。半年はフランスに滞在する滞在費と給料を出すからと言って保障してくれた。「実は、ナンテール大の人類学科長のド・ダンピエルにあなたが一発食わせたということがわれわれの間に話題になっているのです。ダンピエルには日頃いやな思いをさせられている、それで、その話を聞いて快哉を叫んだのです。社会科学高等学術研究院に推薦したのはそれ故です。これで、あなたはレヴィ・ストロース教授と同僚になりましたから、レヴィ・ストロースのコレージュ・ド・フランスで一度公開講義をして下さい」といった。そこで私は日を定めて、「西アフリカ ナイジェリアのジュクン族における王権と人間的世界観」という講義を行った。そのときいろいろな質疑応答があったが、レビ・ピエール・ブルデューが調査した北アフリカの家の空間的利用と、家屋の比較について質問されたのは印象に残った。

ここまでの話は、ド・コッペとの一度目と二度目の出会いである。しかしながらド・コッペは実に誠実な人間で個人的な関係だけでなく国立社会科学研究所の調査班に私を加えて、同時にインドネシアの調査を行おうと計画した。そこでは、若い研究者を加えた調査班を結成し一緒にインドネシアで調査するはずであった。はじめはデンマークの裕福な人類学者のパトロンが資金を出すので船を一艘買って船で巡回して、それぞれの調査をつなぎ合わせよ

うという理想的な研究ができそうであったが、そのパトロンが急病で亡くなったので、われわれは別々に調査をした。私は、インドネシアのタンニバル諸島で調査をする予定であったが、事情で方針が変わり東チモールを調査していたところ、内戦が起こりフロレス島に移った。ド・コツペ達は、アルドーネで調査を行った。調査の結果については出版するはずがうまくいかず、ド・コツペは私の「フロレス島の家族と世界観」という論文をオランダの法律言語学民俗学協会雑誌に載せるようにはからってそれが具体化した。私もニューヨークで知り合ったアネツト・ワイナーというトロブリアンド島を調査した女性の人類学者をパリの同僚に紹介したりして、インターナショナルな人類学者の研究チームを育てていくために協力した。

私が札幌大学に文化学部長として赴任したときに、海外から三人の教授を招聘することができ予算があったので、ダニエル・ド・コツペを招聘した。この招聘に応じ、ド・コツペは一九九八年十二月に札幌大学に来て講演をした。それが、一九九九年の紀要『比較文化論叢』第四号に掲載された、「メラネシアの貨幣」についての論文である。ド・コツペは貨幣の問題を構造論的に交換という方法で論じること慣れていて、当時ヨーロッパで話題になっていたユーロ通貨という問題が統合的役割を果たすにはどのように機能するかを人類学的にあきらかにした。彼は単独論文がたくさんあるが、著書にはならなかったように記憶している。

彼はマルタン・デュ・ガールの孫として生まれ、彼の父親マルセル・ド・コツペはアフリカ独立期の諸国のフランス大使を歴任した。彼のドクター論文はオセアニアの中心的研究メンバーであったジャン・ジギヤール氏に提出された。しかし理論的に彼は、レヴィ・ストロースの影響下にある研究者であった。オセアニア文化の交換をめぐ

るヒエラルキーの研究に力を尽くし、若い研究者を多く養成した。そういう意味では傑出した学者であり、教育的人物であった。(談)